



 Data	2023-11
監督・脚本: テオドラ・アナ・ミハイ	
共同脚本: アバク・アントニオ・デ・ロザリオ	
共同製作: ダルデンヌ兄弟/クリスティアン・ムンジウ/ミシェル・フランコ	
出演: アルセリア・ラミレス/アルバロ・ゲレロ/アイエレン・ムソ/ホルヘ・A・ヒメネス/ダニエル・ガルシア/エリヒオ・メレンデス	

みどころ

日本では身代金目的の誘拐は成功の確率が低い、メキシコでは？彼の国はなぜ誘拐大国なの？誘拐されたら金か先？それとも警察が先？

ドキュメンタリー？それともフィクション？テオドラ・アナ・ミハイ監督はその選択に悩んだが、結局ドキュメンタリータッチのフィクションに。しかし、本作中盤以降の、軍のパトロール部隊の登場には少し違和感が。なぜ軍が“母の聖戦”に協力するの？

しかして、本作のエンディングは絶望？それとも希望？本作の原題が『市民』とされていることと合わせて、それをしっかり考えたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■テーマは？舞台は？監督は？プロデューサーは？■□■

邦題を『母の聖戦』とする本作のテーマは、「誘拐ビジネスが蔓延するメキシコ。激昂した母は、娘を取り返すために修羅と化した—」というもの。チラシには、「娘は私が取り返す—」のセリフと共に、本作の主人公となる母親シエロ役を演じたアルセリア・ラミレスの顔が大きく写っている。

本作は、ルーマニア生まれで、ベルギーを拠点に活躍するテオドラ・アナ・ミハイ監督の劇映画デビュー作ながら、2021年カンヌ映画祭ある視点部門で“勇氣の賞”を、2021年東京国際映画祭で“審査委員特別賞”等を受賞しているからすごい。しかし、ルーマニア生まれのテオドラ・アナ・ミハイ監督が、なぜメキシコを舞台にした誘拐事件をテーマにした本作を監督したの？それは、ルーマニアで生まれてアメリカで学び、今はベルギーに住んでいる彼女が、サンフランシスコに住んでいた時にメキシコにルーツを持ったたくさんの友達ができたと、メキシコとメキシコ文化への興味をずっと持ち続けていたため。要するに、後述のとおり同監督が被害者女性から聴き取った生々しい事実を何と

か映画化したいと願った熱意によるものだ。

他方、本作で注目すべきは、本作の共同プロデューサーとして、そうそうたる次の3人、すなわち、①ダルデンヌ兄弟（ベルギー）、②クリスティアン・ムンジウ（ルーマニア）、③ミシェル・フランコ（メキシコ）が名前を連ねていることだ。この3人がテオドラ・アナ・ミハイ監督の前述の熱意をしっかりと感じとったため、ヨーロッパ、ルーマニア、メキシコを結ぶ国際的プロジェクトが実現したわけだ。そう考えると、本作が各界から絶賛されているのも当然！国際的にこれほど注目されている本作は必見！

■□■メキシコは誘拐大国！その実態は？■□■

黒澤明監督の『天国と地獄』（63年）を観ても、リドリー・スコット監督の『ゲティ家の身代金』（17年）『シネマ42』（172頁）を観ても、身代金目的の誘拐事件は割に合わないことがよくわかる。他方、1963年の吉展ちゃん誘拐事件の身代金は50万円、『64—ロクヨン—前編』『64—ロクヨン—後編』（16年）『シネマ38』（10頁、17頁）のそれは2,000万円だったが、『ゲティ家の身代金』は1,700万ドル（50億円）とケタ違い。しかし、身代金のアップぶりは如何に？

リドリー・スコット監督の『悪の法則』（13年）（『シネマ32』（260頁））を観れば、メキシコが誘拐大国であることがわかるが、その原因は、2006年12月にメキシコで「麻薬戦争」が宣言されたこと。以来、麻薬密輸組織間の抗争が激化し、抗争資金獲得のための犯罪が多角化する中、一般市民を対象とした犯罪も増加し、誘拐ビジネス、恐喝・みかじめ料の取り立て、人身売買・強制売春、石油パイプラインからの燃料窃盗などの事件が急増したらしい。本作のパンフレットには、山本昭代氏（慶応義塾大学非常勤講師）の「映画『母の聖戦』の背景 メキシコ麻薬戦争と行方不明者」があり、メキシコでの誘拐や、誘拐大国メキシコの実態がまとめられているので、これは必読！

それにもかかわらず、メキシコの各都市で市民が普通の生活を営んでいるのは当然だ。本作冒頭、シングルマザーのシエロ（アルセリア・ラミレス）と暮らしている10代の一人娘ラウラ（デニッセ・アスピルクエタ）が、やけにおめかしをしている姿が登場する。母親がそれを手伝っている風景は微笑ましいが、これは、これからボーイフレンドに会うためらしい。なるほど、なるほど。

ところが、その後事態は一変！ラウラを誘拐したことを告げた電話があった後、シエロの前に現れた若い脅迫者の男（ダニエル・ガルシア）は、ラウラを誘拐したことを告げて15万ペソの身代金を要求したから、さあ大変。シエロはどうするの？

■□■カネが先？警察が先？日本と比べて彼の国は？■□■

日本は世界一安全な国であるうえ、警察への信頼も厚いから、万が一誘拐事件が起きれば、まず警察へ！犯人は「カネを払えば釈放してやる」というのが常だが、犯人にそれをきっちり履行させるためにも、日本では警察への相談が不可欠だ。ところが、日本と比べて治安が悪く、警察への信頼も薄い彼の国では？

「私にはそんな金はない」と言うシエロの言葉は嘘偽りのないものだが、「カネを準備しなければラウラの命がない」となれば、頼る先は元夫のグスタボ（アルバロ・ゲレロ）しかいない。今グスタボは、若い愛人と一緒に暮らしている頼りない男だが、カネは準備してくれたから、決して悪い男ではなさそうだ。翌日、シエロからカネを受け取った脅迫者の男は、「15分後に墓地の前で解放する」と言って立ち去ったが、アレレ、その約束は全然守られなかったからひどい。そればかりか、男から追加の身代金5万ペソを要求されたシエロは、地元の実力者である知人のドン・キケ（エリヒオ・メレンデス）にカネを用立ててもらったが、またしてもラウラは帰ってこなかった。さあ、シエロはどうするの？

■□■ドキュメンタリー？orフィクション？その選択は？■□■

1月3日に観た『理大囲城』（20年）はドキュメンタリーだったのに対し、『少年たちの時代革命』（21年）はフィクションだった。ドキュメンタリーorフィクション、どちらが好きかは人それぞれだが、本作はテオドラ・アナ・ミハイ監督が、犯罪組織に誘拐された娘を奪還するため、命懸けの闘争に身を投じた女性の実話をベースにしたフィクションだ。私はどちらかというとなンフィクションよりフィクションの方が好きだから、本作のストーリー展開には全く違和感なく入り込むことができた。

パンフレットにある同監督のインタビューでは、「当初のアイデアではドキュメンタリーを撮るつもりだったけれど、制作を始めるうちにフィクションにした方がいいと気がついたの。この物語とセンシティブな情報の特性上、観察する形式のドキュメンタリーを撮るのは極めて難しかった。フィクションにすることで、私たちが言いたいことを正確に言う自由が得られると考えた」と語っている。もともと、本作はフィクションながら限りなくドキュメンタリータッチになっているので、その点にも注目！

■□■警察はダメ！ならば自力救済は？それは大失敗！■□■

本作を見ていると、メキシコという国の治安の悪さと警察の無力さが際立っている。ルーマニア生まれながら、サンフランシスコに移り住んでいたテオドラ・アナ・ミハイ監督なればこそ、メキシコで自分の娘を誘拐されたという母親の話を聞いて、それをリアルに理解できたのだろう。

警察は頼りにならない！そう思い知らされたシエロは、人はいいものの若い女に入りびたりで、ラウラ救出のための行動を何もとらない元夫と違って、超行動的。若い女性の切断死体が発見されたと知らされた時は驚かされたが、恐る恐る確認した生首はラウラではなかったから一安心だ。その後も、シエロは警察には頼らず、①犯罪組織が出入りしている葬儀社の前で張り込み、②そこにやってきた怪しげな一味を尾行し、③半年前に息子を誘拐された食料品店の女性から、“イネス”という若い赤毛の女が誘拐グループのリーダーであるとの情報を聞き出していくから、探偵以上の大活躍だ。しかしある日、それに気づいた犯罪組織が、シエロの自宅に発砲、放火し、容赦ない脅しをかけてくると、否応なく彼女は恐怖のどん底に！

そこまでやられたことで、治安が悪く警察の力もあてにならないメキシコでは、これにてシエロの娘探しの執念もジ・エンド！そう思ったが、本作では、そこから軍のパトロール部隊を率いるラマルケ中尉（ホルヘ・A・ヒメネスラマ）がシエロに対して意外な提案をしてるのでビックリ！それは、この町に着任して間もないラマルケ中尉は、シエロが収集した犯罪組織の情報と引き換えにラウラの捜索を助けるということだが、なぜ軍がそんなことを？

私にはそれが全く理解できないから、いかに聴き取りに基づくドキュメンタリータッチの実話に近い物語だと聞いても、以降のストーリー展開には違和感が。

■□■なぜ軍の部隊がこんな行動を？上官や軍全体の意向は？■□■

日本の自衛隊は建前上は軍隊ではないが、理論的にはどこの国にも警察と軍隊がある。それはメキシコでも同じだが、どこの国でも警察の役割・任務と軍隊のそれは根本的に違うものだ。しかし、本作に見る、ラマルケ中尉の部隊の任務は町のパトロールだが、彼には上官がいるし、軍全体の指揮命令系統があるはずだ。ラマルケの階級は中尉だが、その上官は誰で、どこにいるの？

そんな疑問が解決されないまま、本作中盤のスクリーン上では、シエロからの情報に従って（鶺鴒呑みにして？）、ラマルケの部隊が、①イネスとその仲間を拘束して尋問、②激しい銃撃戦の末に一味のアジトを制圧し、監禁されていた数人の少女を救出、という形で、ラウラ探しが急速に進展していく。さらに、③ドン・キケが誘拐事件に関与していたという思わぬ情報が判明したため、キケを拘束したラマルケ中尉は、シエロに直接尋問するよう促したからビックリ！そこで怒りを爆発させたシエロは、何度もキケを殴りつけながら、「このクソ野郎！私の娘はどこなの？」と問い詰めた結果、“プーマ”という誘拐の主犯格の名前と、ラウラが囚われた場所を白状したから、すごい成果だ。

しかし、ラマルケは軍人だから転勤がつきもの。ある日、別の任務のため、別の地域に移動してしまうと、ラマルケとシエロの協力関係は・・・？しかも、キケが白状した現場をシエロが訪れてみると、そこは既にもぬけの殻で、血生臭い監禁と拷問の痕跡だけが残されていたからアレレ。ラマルケ中尉の協力によって次々とラウラ誘拐事件の黒幕やその組織性が明らかになっていったが、今やラウラの生存率はほぼ絶望的。そんな中、シエロのさらなる行動は？

■□■エンディングは絶望？それとも希望？原題は？■□■

本作は、当初、娘とたわいもないお喋りをするだけの中年女だったシエロが、元夫も地元の有力量者も、そして警察も頼れないと思知らされる中で、少しずつ“母の聖戦”にのめり込んでいく姿がよく描かれている。したがって、その邦題はグッドだが、本作の原題は『市民』という意味だから、アレレ・・・。本作はなぜそんな原題なの？そのヒントの1つが、パンフレットにある藤原章生氏（記者・作家）の「映画『母の聖戦』～運命にあらがう個の物語、そこにあるメキシコ性」にあるので、本作では“市民”という言葉の意味

をしっかり考えたい。

絶望的な状況下でもなおシエロの意志は揺るがず、元夫のグスタボとともに、広大な牧場の空き地を探ったシエロは、そこに大量の死体が埋められていることを突き止めたからすごい。そこで、ラウラの死体が発見されれば、シエロの我が子を探す旅(=執念)もジ・エンドだが、そうでない以上は希望がある。たしかに、理論的にはその通りだが、確率的には・・・？私はずいそう考えてしまうが、さてシエロは？

パンフレットにある、テオドラ・アナ・ミハイ監督のインタビューを読むと、「ラストシーンを決めるのは本当に難しい選択だった。今のシーンに決まったのは編集の本当に最後の段階であるようなラストにしようと思った。」と語っている。その結果、「オープンエンドにして、皆さんの解釈に任せようと思った。」そうだが、その是非は？このエンディングは絶望？それとも希望？「市民」という原題とともに、それをしっかり考えたい。

2023 (令和5) 年2月10日記